

座談会「山梨の栄養改善黎明期を語る」

平成6年10月13日開催



出席者	元山梨県栄養士会長	深山 武
	山梨県栄養士会顧問	長田正五
	甲府調理師専門学校長	増沢とし子
聞き手	山梨県栄養士会副会長	牛山孝友
司会	山梨県栄養士会学術部長	大木由枝
同席者	小澤量子副会長ほか理事	



はじめに

山梨の栄養改善の歴史を築いた3氏に、昭和10年代後半頃からの当時を振り返っていただき、どのような信念のもとにどんなご努力をなされたのか、さらにはわれわれ後輩に望むことを語っていただきました。（一部 不鮮明なところは、□□□といたしました。また、藤巻一雄会長は都合で欠席でした。）

大木

それでは、これから座談会に移らせていただきます。司会進行は牛山副会長にお願いいたします。

牛山

記念すべき座談会の進行役に指名されましたが、力不足とは思いますが、ただ今より司会進行を努めさせていただきます。

本日は、山梨の栄養改善黎明期を語ると題しまして、本県の栄養士業務の先駆者3名をご紹介します。戦前から戦後の過渡期である、困難な時代に先駆的な役割を担われて、開拓者的な精神に満ちて前向きに栄養士活動に従事され、その実績が社会的にも大きく評価され、今日に至っているわけです。その黎明期、夜明け、はじまりの時期、この課程における、いろいろななかかわりをなされた大先輩の一人お一人から、ゆっくりと語っていただこうと思います。

最近では高齢化社会に対応するために、保健、医療、福祉の連携がさげばれています。こうした中で、様々な模索がなされています。最近の動きとしましては、地域保健法の見直しという大きな波のうねりの中で昭和22年に交付されました保健所法が見直されました。これにともなって栄養改善法も連動して改正をされたということです。その内容は、一般的な栄養、食生活の指導業務はについて

は、都道府県、保健所から市町村に委譲されることになりました。これが施行されるのは、平成9年からになっています。

また、病院では昭和33年から実施をされてきた基準給食制度が廃止されまして、新しい診療報酬体系でこの10月1日より動き始めたところです。またこのような大きな変革期を迎えて今度新たな展開が予想される場所でもあります。こうした時にあたりまして、本県における昭和10年代後半から20年代末頃までを区切りとしましてお話を伺うことにいたします。その中身の構成といたしましては大きく6つに構成されております。

その第1は、それぞれの先生方の経歴、概略をお話していただきます。各項目ともそれぞれお一人お一人にご発声をしていただいて次に進むこととします。第2に先生方がこの道を選ばれた動機についてであります。それから第3は主として従事された業務につきましてご紹介をいただきたいと思いません。第4は、この時代に活躍をされました方々、知人、友人等についてご紹介をいただきたいと思いません。それから第5が最も印象に残っているお仕事等につきましてご紹介いただき、最後に第6は後輩に望むことということで、後に続くものの指針になる言葉を頂ければありがたいと思いません。こういった構成で進めてまいりたいと思いません。なお、必要に応じて途中、小沢副会長にもご発言をいただくこともあります。以上こんな風な構成で進めさせていただきますのでよろしくお願いたします。それでは当初に紹介のとおり順を追って進めさせていただきます。

まず第1の先生方の経歴につきまして、各お一人お一人から細かなことをご紹介していただきます。ことに本県の栄養改善ということを中心として、まずは経歴からご紹介いただければと思いません。

まず、はじめに長田正五先生、先生は大正5年生まれ、78歳というお年ではありますが、よろしくお願いたします。

長田 ～厚生省では栄養士規則の作成や栄養士法の改正等を担当しました。～

「ご紹介いただきました長田でございます。」78歳あと2ヶ月で79歳になります。簡単な略歴と仕事を申しますと、旧制身延中学を昭和9年卒業です。物理学校応用科学科に入学いたしました。なかなか進級も卒業も難しい学校でした。だいぶ怠けていたのでしょうか、そうこうしているとき警視庁の工場課長の鈴木宗正さん（後に山梨県の内務部長）が栄養学校に入れて栄養士にしたらと話があり栄養学校（当時は芝金校舎□□□）に入学しました。初めあまり気の進まず適当な状態でした。1日に物理と栄養学校の二校に通いました。鈴木さんは埼玉、警視庁と工場行政のベテランで私の先輩同僚でお世話になった方がおります。深山先生もよくご存じの方です。物理で応用化学を勉強しているうちに栄養がおもしろくなり、栄養士を目指すことに決めました。そして、栄養学校の第12回の卒業生になりました。同級生に平井伝と言う人が居りました。親友でなんでも一緒にやる仲間でした。昭和12年頃で政治のことなどよくわかりませんが、戦争はなかなか難しくなる、兵隊さんの健康が心配になり、栄養知識を備えた野戦調理師をと、大物政治家大野伴睦先生にお願いに言ったことが思い出されます。平井くんは栄養士として立派な手腕家でした。後に栄養士のあゆみで故森川会長が書いておりますが、重要役目をしております。物理学校は徴兵のがれで在学しておりましたが、もうそうしておられぬので、徴兵検査を受けました。甲種合格でした。甲府歩兵19連隊に入隊しました。すぐ満州黒河の□□□屯に派遣され、続いて陸軍習志野学校に練習兵として派遣されました。ここでいろいろの人とお逢いして、一層栄養の重要性を知るようになりました。昭和16年に除隊することとなりすぐ警視庁の工場課に警察技手として勤務するようになりました。ここは鈴木宗正さんが活躍した部署です。そこで主として、精神と健康を合わせ修練をするところで、済美館が本務でした。ここに、財界の方、行政の人、府県栄養士さん等々が修練に来られました。私の下には洋食、和食専門の調理人がおり、献立に苦労したことが思い出されます。何しろ若いので仕事もやりましたが、でたらめもやりました。筋の通らぬ命令で、係長、課長と張り合っ辞表を出しました。当時、兵庫県栄養係長が例の平井君で、彼は「厚生省にゆく段取りでいたが、ある仕事を命ぜられ出向できない、なんとかならんか」と言うのです。偶然にタイミングが合い、兵庫県に行くことになりました。平井君が命令された仕事とは、兵庫県の食糧需給計画を作ることでした。もちろん栄養を十分考えたものです。平井君と二人で、毎晩計算機をがらがら回しました。神戸市場、食糧の生産統計人口推移（いろいろの国の外人なども考えに入れなければなりません。）若い二人は大変なことでした。四ヶ月か五

ヶ月くらいかかって何とか作ったように思います。

平井君は出向したが、今度は私に召集の赤紙が来ました。そうして、満州、沖縄と2年あまりを過ごしました。この間栄養士であることが幸いして、糧秣、栄養、文書等をやり大事にされました。時々軍医さんと給食につき話し合うようになりました。大変興味ある部署で楽をすることが出来ました。

終戦になり、もとの古巣、兵庫県庁に帰ってきました。係長は中島吉彦さん（元日本栄養士会監事）でした。日本栄養士会の設立は、昭和20年5月21日に設立総会が帝国ホテルで行われました。それで兵庫県で第一回の総会を引き受けるよう本部から指示を受け、実施することになりました。さあ大変の仕事でした、物はない、会場はない、宿舎はない、ないないづくしでした。会場は宝塚の劇場の協力で、宿泊は宝塚の旅館組合で食糧は神戸の中之島市場の援助をいただき盛大に行うことが出来ました。GHQからサムス准将、ハウ准将、オダネル女史等の幹部、厚生省からは、後に岡山県知事になった三木公衆衛生局長、栄養課長が出席され、又栄養界の重鎮である佐伯矩先生その他大先生が出席され盛大でありました。総会と同時に全国輸入食糧感謝の展覧会等を開催しました。いろいろの輸入食糧を集めるのは大変でしたが、ちょうど身延中学の恩師の井原稔先生が京都食糧事務所長をしており集めて下さいました。苦労もありましたが、盛大でGHQ、厚生省ともに満足したようです。終わりましたら、厚生省から「お前 厚生省に来ないか」とお呼びがかかりました。故郷の山梨にも近いしと思い、行くことに決めました。当時栄養科は有本邦太郎課長、大磯敏雄先生、村尾、山石田□□□先生、八鍬太郎、半田武雄、三宅稔等の大先輩が居られました。

病院給食は今考えると形ばかりでした。重病人の枕元でコンロでうちわをパタパタ、これが当時の大病院の有様でした。本当にないづくしの給食でした。給食資材のため、大磯、岩田先生達と経済安定本部、農林省等と交渉に明け暮れる日々でした。当時は日本の復興に重点がおかれているのに働くに十分な食糧のない時で、弱者に特別の配給をすることは困難な時でした。しかし 努力で米、大豆、砂糖、味噌、醤油、落花生など頂けたことはありがたいことでした。米軍の放出食糧を通産省より割り当てをいただいたこともあります。グルタミン酸を味の良い食べ物を作るために特配して、局長に「一さじの監督が出来るかー」なんてやられたこともありました。

また、自衛隊の給養食糧の算定を頼まれたり、学校給食のパン規格を日本パン協会の阿久津正等と作って、いろいろパン製造所で試験焼きをしたり、忙しい毎日でした。特配の幼児食ビスケットの材料の配合に、協会元旦参りしたこともありました。いろいろの栄養の関係ある仕事に首を突っ込んで勉強させられました。

食品の栄養的加工が好きでした。いろいろやるので上司からにらまれ、首の問題が出たようです。栄養行政からはみ出したのでしょう、深山先生が心配して下さいました。ちょうどその頃凶作でした、葛原工業が人造米をやろうと言うときでした。私は、厚生省を辞めて葛原工業の営業課に入社しました。社長直轄でした。当時昭和天皇は凶作をご心配されて、人造米を試食されるというので大膳課長より注文がありお届けしたこともありました。吉田総理に試験炊きを食わせたり、国会では社会労働委員会、農林委員会等で試食会をしたり忙しい毎日でした。人造米には、ビタミン添加は忘れませんでした。厚生省、葛原工業在職中は楽しく仕事が出来ました。

そうこうしているとき、深山先生が椅子を作ったので、山梨に帰ってこいと言うので故郷山梨の土を踏んだのが昭和29年でした。忘れましたが、栄養調査をやっているとき、GHQ命令で公務員の俸給を決めるために、1,500Ka1でマーケットバスケットを作れということがありました。□□□して、いろいろの学者、医師等資料を集め2,000Ka1まで勝ち取ったことが思い出の一つです。

深山先生のお世話で公衆衛生課の栄養担当をしましたが、栄養行政の府県の現場の難しいことを知りました。「黎明期を語る」ということから少しはずれますが、日本ビタミン委員会の依頼を受けて、学校給食のパンに発育、成長を促すアミノ酸のリジンを追加し効果を測定したことがありました。これは後で、国会で人体実験を行ったと、いろいろ騒ぎになり、また県議会でも取りあげられました。研究班長は、栄養研究所の故速水先生で苦労しました。

また、長寿の問題で上野原町のご理解をいただき、国立栄養研究所の多くの先生に協力して大がかりの調査を何回か行ったことがありました。この結果は、現在の長寿の栄養指導資料の一部となって

おります。

何しろ山梨に帰ってからは、深山先生が永年培った基礎にのっていろいろと仕事が出来たと思います。

牛山

先生ありがとうございました。項目だてが最初申し上げたようにいろいろありますので、それぞれの項目に係わる部分でお話をいただくようにしまして、次に深山先生にお願いいたします。深山先生は、明治の御代の方で明治42年の生まれです。84歳になります。先生よろしくお願いいたします。

深山 ～代用教員時代に、子どもの栄養の重要性を痛感いたしました。～

「経歴といたしますと、とても長くなって長田先生は仕事まで入って長くなりましたので、そういうことは分けて、実は長い間ご厄介になりました（私の経歴というやつは）梶原徳蔵さんが、県政功績者申請の時書いてくれた経歴でございます。いろいろ詳しく書いてあります。経歴だけでたくさんだと思います。主要のところでだけしてみたいと思います。だいたい当初から大先輩大先輩と言われていまして、穴があったら入りたい気分であります。大年寄りと言うことで年をとったなあと思います。先輩と言うことならば、何をやったかと言うことならば、軸にしていることがございます。私の経歴でございますが、県に入りましたのが昭和13年の8月でそれからずっとおりまして終わったのが昭和37年の5月8日と言うことでございます。その間何をしたかと言いますといろいろあります。まず第一に私が県に入ったのは私の知らない間に発令され、父親とその当時県会議員でありました古屋先生が共謀しましてあいつを早く家へ戻してこなければだめだと言うことで父と相談して発令してしまったと言うことで、それが9月7日のことで、私が家に帰るのがいやだったので戻らなかったある日、下宿へ帰ると何にもなく、机と洋服ダンスが残っていたと、下宿の人に聞いたら『今日人相の悪いおじさん2人が来て、荷物をまとめてもって行っちゃったよ』とまあそれも分からないこともなくて、長男ということでも私は次男ですが、長男は亡くなりましたので、そういうことになるのですが、お寺に、生まれたらつれていって、それを拾えば長生きすると言うことで、お寺につれて行かれ、名前も方丈さんがつけたということで、お寺とは縁があるようです。まあなるべく縁がないようにしたいと思いますが、檀家総代を言いつけられましてやっているわけです。ところがご承知のよう甲斐の国分寺は史跡の保存の名所になって指定をされまして、それをどういう風にして何処へもっていくかと大わらわでございます。そんなことで半日はそれに使っていて、まあこれも一つの縁でございます。出来るだけ縁をつないでおきたいと……。そのようなことで帰ってからです。私はその前に大森機械工業徒弟委員会で子弟の教育と給食、衛生管理をしていまして、それがですね、どうしてこういう人になったかと言うことは、私が今している仕事をご理解いただく上で重要なことだと思いますが、私は本当は外語へ行きたかったのですが、外語の試験時にちょうど風邪を引いてしましまして、2日目は39度の熱を出して試験が出来なくて、そういうことがありまして、それで仕方なくどこかへ行こうということで、次には青山学院の英語へ行くことになりました。ところがそこで野球をやっております。野球をやるということはまた、皆様方にお聞き願いたいと思うのですが、私が2年になったとき、軟式野球で優勝しているわけです。それが、3年になりますとそれがなくなりました。硬式になってくるとその時にはもう選手が入学試験があるので、野球選手は入学試験を受けなければならないのでやめたいと行って大部分が去っていった。それもこの間山日新聞にも出ました古屋真一郎なんかと一緒になんです。そして、風間（耕作部）、私達は一生懸命勉強するということで、そしてこっちも腹が立ちまして何をいうかと、試験は試験、野球は野球じゃないかというようなことで、まあ無理をしたと言うこともあったわけですが、それが現にたたったわけですが、やっぱし受験の時に最後にうまくいかなかったと、そのようなことで大学に入ったわけです。その時に史学部がありまして、そっちをやっていた福祉関係の山本さんという人がいまして、その人が大森機械工業徒弟委員会という中小企業で50人から100人の徒弟が募集されまして、それが2年から3年たつうちに一番多いのが脚気、二番目が肺なんです。それでもって帰ってしまうということがたびたびありまして、厚生省でもこれをなんとかしようじゃないかと、せっかく働きに来たのに2年か3年で帰ってしまうというじゃどうしようもないということで、これを何とかしようとして大森機械工業徒弟

委員会が出来たわけで、そういうところへ入っていった関係で栄養に対しても、あるいは徒弟の教育に対する関心もいろいろな所にありました。ある日キャッチャーがいないというので、代わりにキャッチャーをやってチップで肋骨を折ってしまい、学校を休学してしまった。伯父が校長をしていた関係で代用教員ということで、非常に子供の教育に関心を持ち、だんだん興味を持ってやっているうちに2年たってしまって、もう戻ってもしょうがないと思って子供の教育の中から栄養の重要さということを感じたしまして、興味を持ちまして、私のいとこや中学で一緒に堀内というのが、栄養の学校に行っていて、帰ってきて子供の教育や健康のことを相談しまして、よし栄養のことをやろうと佐伯先生の所へ行ってやろうと。『うるさい親父でお前につとまらんぞ』と忠告を受けたが喧嘩をやるのはやるが、栄養学をやろうと思ったのですが、親父が荷物を持って行ってしまったので、行かなくなったのであきらめました。15日以内に就職しなければいけないのに、どうなっているのだ、面目がないぞといわれて、しかられて戻ってきたわけです。

国民体力法というものがあって、これは結核要注意のツベルクリンが陽性になった直後の又あるいは体重が落ちている者を入所させて、いうならば第二乙種の者を軍隊教育、強化ということで、鍛えるということで、結核予防法でやろうということで、湯村で仕事を始めたんです。県に立派な先生がいました。県下に八カ所の修練所が出来ました。これを廻って殆ど家にいることはなく、今その癖が日本だけでなく外部へ出かけ放浪癖がついた。その頃は、警察部衛生課と言っていた。長いサーベルをつけたお巡りさん達も可愛がってもらって仕事をし、指導でなく、取り締まりであった。そのうちに環境衛生監視員もやらされたり、墓地の方もやらされました。看護婦、保健婦、助産婦の養成、試験もやっていた。県の労働組合の方より分会長として出て行けということがあり、そこで言いたいことを行って委員長をやらされ、県の自治労の委員長をやることになった。かれこれ20年たって恩給をもらうから、やめて県会をやれといわれ職員から出てないとまずいと、県会をやるため1年間準備をして、その間ベターホームプロダクトをやった。県会の方はだまされたとはいわないが、ベターホームプロダクトの方は、森川規矩にだまされたと思っている。県会を8年やり、監査委員をしたり、いろいろな仕事をしてきました。そうこうしているうちに栄養のこともやったり、中央道、広域農道の問題もやったり、人が良いというか、使い良いというか、いろいろなことがあり、栄養のこともそれに中心に出来ないの、早く引きついて、やってもらいたいと思っていたが、長田さんがその頃お母さんが具合が悪くだめだったということで、これもだめで延び延びとなってきた。

その中でろくな仕事もできなかったというのも事実でございます。それを県政功労者、叙勲だとかみんなが心配してくれまして、県会の方でやってくれました。五等だとかということで、初めて知ったわけです。大先輩ということになったが、人が良いからということなのか、私自身はそんなに考えていません。仕事の内容について、こんなことをしたというのは又後でお話しします。今一日一万歩歩き、一時間以上は本を読む。私は、栄養士としては落第である。今『落第栄養士の手記』というのを書いています。いかにして、成功して失敗していったのか、広い意味で観察して、対応していただきたい、間違いのない栄養士であって欲しいと思います。細かいことは、経歴を見てもらえば解ると思います。試験をやったりとか、藤巻君なんか僕が試験をして入ったとか。もう一つは、中村君、梶原君が良く一緒にやってくれた。なぜ男を採ったかという、キッチンカーというのがあったが、栄養指導をするのに、中村君がリヤカーで引き歩いた。はかりを担いで山の中を歩いたり、ずいぶん無駄もあったが、これからは効率的に、どうやっていったら良いかということを考えて欲しい。現実に具体的な話もしたいと思います。84歳になりましたが、今までの経歴というか空間的なお話をしました。」

牛山

「次は増沢先生ですが、先生は大正9年生まれで74歳でいらっしゃいます。若く言って欲しいとおっしゃられましたが、なかなかそういうわけには行きません。証明どおりでございます。」

増沢 ～香川先生の「実践することが大切」に感動し、調理師学校を設立～

「栄養士会の皆様、今日は本当にご苦労さまでございます。私自身としましては、ある殿様が自分の人生の経歴を書きなさいと部下に言いつけました。5年たっても、10年たっても出てこないで、

やっと10年たって、又30年かかって出てこない。最後に『人間はただ生まれて死んだ』とただ二つ二行に縮まってしまったという話がありますが、私もその心境です。又覚えていないし、話も自己中心的になると思います。記憶に残っている範囲でお話しします。私もお二人の先生方がおいでになった大森の栄養学校へ参りました。佐伯先生は世界でも有名で、すばらしいバックボーンをお持ちで、栄養士の技術とか、学問とかという以前に精神的な『活』を見るというような、先生でして、そういう学校を出た人が、全国の行政にいらっしゃったと思います。お二人の先生もそういう形だったと思います。私自身は甲府二高を出て、家政科へ言ったりしたのですが、信州で大きな割烹旅館をしております、父が日本酒の城を建てるということになり、現在もまだその時の設計図をもっていますが、それで倒産しました。藤巻ていさんと同じ諏訪高女にいました。倒産の関係で甲府へ来て、小学校の講堂のような所に父と二人きりになり、母も父を捨てると言うことになりました。父が脳溢血になり、食事療法が必要だと言うことを痛感しました。その時、五味みえ子さん、確か山梨県の県庁にいらした栄養士さんで、大森の学校を出た方で、その方に話を聞いて栄養学校へ行きました。2年目に空襲になり、こちらへ帰ってきて、県庁に入ってしまった。その時、隅の方に紅顔の美少年の深山先生がいらっしゃりました。私の目の前に満堂さんという男性の栄養士がいました。後になって相模女子大の講師をしていらっしゃるとのことです。あと岩崎さんという栄養士さんがいらっしゃいました。たぶん大森を出ていたと思います。その岩崎さんが神経の細かい人で、痩せたいと言って、リンゴばかり食べていて、えらい栄養士があつたもんだと思いましたが死んでしまったです。もう一方、薬剤師でもあつた（医専が出来たとき）竹口はる子さんが入ってきて、医専に行ったりしていたが、医専が廃校になったりして竹口はる子さんは栄養士の仕事はしていなかったが、満堂さんの所に来ていた。岩崎さんと竹口先生は何をして良いか困っていました。満堂さんはいろいろ頼まれて北巨摩やらいろいろ歩いていて私もついていっていた。岩崎さんと二人でいったい行政というものとはどんなものかと思ってお米をもって、かの有名ないま栄養学の民間だけと会を作った森川さんが共同炊事の本を書いたりしていた県庁へ行きました。そこへ行って、話を聞きました。その次には水戸へ行って来れました。お米をもって行って旅館に泊まって、あちこち県庁を見て歩きました。佐々木さんという人が大月保健所において、何にも仕事がないから一年間いてやめられました。そして深山先生より農家へ行ってくれないかと言われました。厚生課というところがあり、保健婦がいて、薬剤師がいるというそこへ廻っていきました。戦争しているときでした。農村の仕事をしていましたが昭和24年にマッカーサーによって農業団体が解散になりました。一ヶ月も泊まって、金丸信さんの物置を改造して共同炊事というものをやりました。いろいろな栄養士が集まりました。深山先生と農繁期の共同炊事をしたところと、しないところとどちらが栄養がとれるかという調査をしたこともありました。24年に農協を辞めまして、教育庁を頼まれました。いまの丸山先生方が日本の学校給食をしっかりと山梨の学校給食を築かれた。私もそこを手伝ってくれと言われ（田淵さんという人が保健体育協会の会長さんだったが）小林町子さんが双葉小学校にいらっしゃって、スキムミルクの普及をしていた。物が無い時代で、校長先生と顔をつきあわせていたが、3ヶ月で予算を使わなければならないというような窮屈なやり方がいやで、私のわがままですが辞めました。そして勉強し直したいと思いました。ちょうど□□□さんが仲人で仮祝言をあげ結婚して東京に行きました。そこで栄養士の養成の短期大学が香川先生のところでこれから出来ると言うときで、4年生もできないし、栄養士になってしまった人に、栄養推進普及リーダー養成部に3年通いました。その後5年くらい毎月リーダー研修と言うことで召集されまして、28年に山梨にリーダー普及部を創りましょうということになり、実践活動をするということになりました。香川先生を同窓会に招いたり、あちらへ行ったりということをして、普及会活動をして料理教室を始めました。その後、調理師の養成をしようということになり、調理師養成の許可を取りました。昭和34年に調理師学校を開きました。香川先生が短期大学を創りませんかと佐伯先生に話したら、佐伯先生は『私は、専門学校でいい』といて、香川先生が短期大学をはじめ、現在大学院まで創られたのです。古屋先生が『学院でやってくればいづれ先には教授とするから』と言ってくれましたが、私は先生になるというのは好きでなく、県庁に入った時には22歳位で村へ行けば一番上に座るのがいやで、実力もないのにという感じで、横浜へ行って、親を手こずらせたりもしました。その頃、県庁は3日行ったら辞められないという時代でした。役人はのんきでした。

香川先生が実践というのは学問をみんなに発表しても実践しなければだめだといっていました。『料理を教えても、それを実践して出来ないと言う、なぜかと言うことが、あなた方の課題だ。』と言われたのが感動しました。そしてお台所ニュースというのを作りました。山梨大学の学長夫人が創刊号で、山梨放送の風間夫人とかが書いてくださいました。何年か作っていました。今は学校が専門で50人の学生をあずかっています。丸山先生や中村先生にもいろいろお手伝いいただきました。』

牛山 ～栄養士の道に入られた動機は？～

「先生方が幅広く活躍していらっしゃったので、次は動機と言うことでお話ししたいと思います。」

長田 ～部長のすすめがきっかけ～

「動機については、おおざっぱに話しましたが、応用化学をやっている頃に関心、部長をしていた鈴木さんがお前やれと言われたので、工場給食の草分けの人に言われたのがきっかけで、土屋健太郎さんという栄養学校の第一回卒業生で、その下に石川さんが監督官でいらっしゃって、自分がこの仕事に入りました。」

深山 ～教員時代に学習と栄養と関係があるのではと思った。～

「小学校の代用教員をしていた時に、子供の学習態度をどうしても栄養と関係があると。」弁当をもってこない子供もいたり、弁当を隠して食べるということがあり、栄養の悪い子は学習にも問題がある。もう一つは、偏食の問題がある。二軒ばかり裕福な家の子があつたが偏食が激しい子がいた。そんなことが関心を示した。中学校の先輩や佐々木先生と相談をし、栄養のことに踏み込んだ。今でもこの道に入ったのは誤りではなかったという信念はあります。一生懸命になったが、現在の老人の健康を考える中でも、栄養というものが大きなウエイトを占めていると思うので、栄養の仕事をしてきて良かったと思うし、103歳くらいまでは生きてまだ頑張りたいと思う。」

増沢

「先程、動機はお話ししました。」

主に行った業務・苦労したことはなんですか？

長田 ～厚生省時代、病院給食での食糧確保に努力した。～

昭和10年から29年まで県外において要求の黎明期には係わっておりませんので、ちっとお断りしておきます。今まで述べてきた業務を補足しますと、戦時中は兵庫県で県民修練の仕事をしたり、農繁期の共同炊事の指導を一生懸命やっておりました。修練は瀬戸内海の赤穂と日本海の香住に修練所があり県内の若者を集めて一緒にやりました。また女子奉公隊の教育や農繁期共同炊事のやり方を指導しておりました。

東條総理が食糧政策で玄米食奨励を姫路で話された後で、私の理論として、玄米食より七分搗き米をと講演して、県庁に帰って、すぐ知事に呼びつけられ大目玉をいただいたことが思い出されます。

厚生省着任早々関東の風水害の救護班として、三宅技官、徳富技官達と被災地に派遣され、食糧の心配をしたり、乗り物もなく歩いたりトラックの上に乗って、茨城、栃木、群馬、埼玉を廻りました。その頃の栄養課は食品衛生、乳肉衛生、栄養と同一課でした。前に話したように、給食材料の確保とGHQの報告に追われる毎日でした。その頃病人の栄養を高めるため療養食を作ってやろうと課で決まり、材料は脱脂粉乳、落花生、砂糖、ビタミンが主原料でした。参加企業は、雪印乳業、旭化成、不二家、わかもと等の数社が各々担当してくれ、療養食として都道府県に届けました。

国民栄養調査はなんと言っても重要な仕事でした。報告が遅れると国際連盟からの食糧の割り当てが減るので一生懸命でした。FAOの会議に出よう言われましたが、英語がだめですので断りました。また韓国の栄養調査に行くよう言われましたが、忙しいので止めました。GHQから沖縄の栄養調査の要求があり、大磯先生、故速水先生その他国立栄養研究所の諸先生20名余りで、団長は大磯先生で事務局をやりながら参加しました。その時一緒された方には都栄養士の皆さんで故桑原先生、

現東京都栄養士会長の高橋重磨さん、現日本栄養士会理事長の花村さんも居られました。

その後、栄養士法、栄養改善法を作るお手伝いをしました。法律的なことは現在本会の顧問弁護士の穴水□□真さん（山梨県中巨摩郡八田村のご出身）が栄養課事務官として居られ、一生懸命やってくれました。故人となった日本栄養士会事務局長の若井宣弘さんとよく国会通いをし、議員宿舎に泊まったりしました。当時破防法の盛んな時で深夜議会になることもしばしばでした。

なんと言っても印象深いのは国民栄養調査です。立派であるよう特に努力したものです。国会でも重要視しておりました。国会議員の先生からしばしば資料を求めてきました。奥むめお先生などご自身で来られ、納得がゆくまで説明を求められましたものです。またいろいろ個人、団体、学校からもらいに来ました。既製の洋服屋さんが身体検査の資料を利用したのにも驚きました。栄養強化の資料として、食品会社関係で相当利用したようです。

昭和20年代は、私は国民栄養調査等よく全国を回りました。その時に感心したことは、山梨は栄養改善の種々の仕事の流れが大変優れていたことです。深山先生の下には藤巻、梶原、中村先生がおり、各保健所の栄養士の連携はすばらしいものでした。

栄養士会のマークのことですが、栄養士会本部が全国に募集をしましたが良いものがないので、本部は困っておりました。半田先輩の案で佐伯先生の十訓は何だと言うことになり、十の花びらの紋章が生まれました。佐伯先生は就職の時に十の戒めを書いて渡して居られました。私は不肖の弟子でいただきませんでした。図案化され、制作されたのですが、これは山梨県の内務部長をされた鈴木宗正さん、半田武夫さん、三宅実さん、若井さん、私も加えていただいて出来上がりました。もちろん、その他の方々の協力と承認をいただきました。

長々とおしゃべりをいたしました。こんなのが私の栄養士50余年の略歴と主な仕事の様子です。ありがとうございました。

たんぱく質確保のためにクルミやドングリの栽培を普及した。栄養士の社会的地位が高く評価されることに尽力、広く人と接して論議し違った意見も聞き、話し合うことが自分の見方を広くする。

深山

「今は飽食の時代と言われますが、食糧の欠乏の時代だったのでミルクと小麦粉の時代だった。全体の摂取量が足りなかった。国民の状態は結核、脚気、感染症が増えて体力が衰えてきていて、何をすべきかと言うことが課題だった。小麦粉とミルクにどうしていくか。浅間神社の裏へ野草を取りに行つてヨモギやアカザを利用して、たんぱく質が足りないので経済課と話して、兼務となりクルミを長野から取り入れて植えた。ドングリも植えた。毎年8月に戦争を忍ぶ会をしているが、ドングリを使って作ったらおいしく作ってしまったので、当時とは違って、こんなうまいものだったのかと笑い話になった。もう一つはカルシウムの問題、ビタミンB1、Aが足りないと言うことで、強化食品の問題で、味噌、たくわんの問題があり、豆腐の問題があった。課長がその時『いろいろ難しいことを言わず、みかげ石を入れておけばいいじゃないか』と言われてこともあった。食品の強化ということも必要であると思った。もう一つは、農繁期の共同炊事という問題がありました。忙しいから食事を作るのが大変で材料もないと言うことで、みんなで共同炊事室を作り共同炊事の指導をすることがあったが、豊かではないわけですね。朝も夜もしなければならぬと言うことで、やっぱり女性には大変であると申し上げましたが、やっぱり男性でなければえらいのじゃないかというような栄養士の指導が必要であった時代だと。しかし、そういうことを献じてやりまして、実は私が公衆衛生院へ派遣教育へ行つたときに、その実態報告をしろと言うことで、□□□で山梨の農家の共同炊事をやりましたら、それじゃこの実地見学は、山梨へ行くぞと言うことで、押しかけられまして、またみんなに苦勞をかけて、県民会館の宿に泊まって宿の食事も見たりしたとそういうようなことがございました。それからキッチンカーにつきましては、先程申し上げたところからやりますけど、これもですね、山梨の中村君や梶原君が作ってくれた。そのことがこれじゃどうしようもないと、こういうものも作らなければ、私はもう各共同炊事を作るときに、炊事をやれと炊事場を作れということをやったけど、これも出来なんだということもあるわけですが、それもできなうでそのうちにキッチンカーも作ったと。この写真もたくさんもっています。どこでどのような指導をしたかというようなこともございまずので又見ていただきたいと思っております。またもう一つ人の人の問題でございまずが、私はその

頃、学校の □□□学校が池田にございまして、三神先生やそれから□□□学校の先生が非常に熱心に教育してくださいます。学校給食の前提として、そういう中で実は、結核要注意者の食事をさして食事療法ということがございます。人の和が大切だと、一つお話したいと思って、これをずっとやってたわけでありまして。その頃に学校教育の方には向井さんという薬剤師さんがおりまして、非常に私の強い人でありまして、それが満堂くんという非常に気のいい人で、まあ消極的なところもあった方でしょう。人の言うことを聞いてですね、□□□先生の方を重要視して私が喧嘩をしに行ったということもございました。やはり人の和が学校教育だから、衛生部だからというようなこだわりをやったでは、県民の栄養なんてものは良くなるもんじゃない。やはり両方がお互いが、学校は学校、農村は農村と、そういう分担はもちろんわかりますが、協力してやらなければならないと、このように考えるわけでありまして。それからそういう点で、仲間も□□□話がありましたが、非常にその頃は栄養士は尊重されたわけでありまして。私がまあこっちへ帰ってくる、そういう無理なことがありましたけど、やはり希少価値ということもありまして、私達は、吏員の雇用だった。薬剤師と同じ待遇をされたということです。少ししたら薬剤師の今申し上げた□□□私を二等官にしてくれた。その頃は二等と三等に分けていて、二等は高等官といわれて高等官食堂といって、食事も別になっていて、私はそこへ行かなかったけど、栄養士も尊重された。そういうところで今の人達は、先生、先生と言われて、先生になった気ではないかと思う。もっと謙虚にならなければならないじゃないか。いわゆる、特に申し上げたいことは、強請、意地っ張りというのは、仕事には意地っ張り、強請にやると言うことは良いのですが、強請にいじばってやっているのが正しいのか、どうやれるのか。という判断が間違えやすいのです。判断の方法は一面から見ただけではだめで、いろいろな面から多角的に見る必要がある。遠くから見て円か、円筒か円柱であるか解らないものも、少し離れて、角度を変えると円であるか円筒であるか円柱であるかが判るように、物を考えるときも、同じで正しい角度で尺度で検討していく必要があると思う。それから始めないと、連帯を乱すことになる。またとんでもないことを決めてしまう。栄養士会におきましても、同じようなことがいくつもあり、栄養士法の改正の問題でも、幾度行っても皆様に理解してもらえない。この問題がどうして、そうなったかということ、詳しく書いて理解してもらわなければならない。これがなければ栄養士の評価がされない、栄養士が良い仕事をし、栄養士が社会的に高く評価され、それがよい循環となって、国民の栄養が改善されていくことがなされていくと思う。徒然草にも書いてあるが、やはりあらゆる面から、物を見るということが必要だと思う。次に七分つき米の問題ですが、手塚先生が力を入れて、相当頑張ったと、やはり多くの人の協力を得て、出来ることであります。私は佐伯先生と3回喧嘩をやっています。一つは、女子の方が多い学校でございまして、友達を連れて、近くの風呂屋から、石炭をもらってきて、バレーボールのコートを作ったら、『こんなことをすれば、明日、親父に呼びつけられるからそのつもりでいろ』と言われ、案の定 怒られ、『学校で作ってくれといっても、やらんので自分たちでやったのに、何が悪い』といったら、俺に断らないでした、と言って連絡しないのが悪いと言われた。もう一つは、学校栄養の養成施設はまだ一つだった。そして栄養学校の指導は、役人が講師だった。厳しい指導を受けた。実際には、官立のようなところであったので、官立にした方がいいではないかと佐伯先生に話したら、先生が、『ばかやろう 国では栄養士なんて言うものは養えない。そんなことが解らないで、ろくな栄養士にはなれないぞ』と叱られた。もう一つは、栄養士会が三つ四つ出てきましたから、私達の会を発展的に解消して、全部の栄養士の卒業生が集まって、一つの団体を作ろうと同窓会で話したら、『お前は帰れ』と言われ、お叱りを受けた。今そうなっていれば、二年だ何だと言うことがなく、山梨学院の場合でも、そうですがやりましょうと熱心に言ったのですが、なくなりまして生きていないわけです。そういうわけで官立のものが出来なかった分けてこれが三つ目です。今でも佐伯先生に怒られたことを思い出します。天皇の次に偉いのは佐伯先生であった。今考えてみると栄養士会が頼りないが、他の問題が良くなりましたけど、やはりみんな私立である。私立が悪いという分けではないが、これが出来なかったことは残念であります。もう一つは学校が長いと言うことは、私自身、学校を高く評価しているわけではないが、しかし学校でいつも仲間と接していると言うことは、人と接して論議し、違った意見が入ってくる、話し合う、そういうことによって、自分のものの見方が広くなっていく。学校生活の利益ではないかと思う。栄養士の養成施設でいくからでもあるというような安易な考えを起こさせないような栄養指導でなければならないと思いま

す。また後でご意見を伺います。」

増沢 ～たくさんの料理教室をさせていただきました。実践活動に力を入れています。～

「深山先生の時代にも私も生きて参りましたから、農村では、農繁期、共同炊事で雨の降る日はわらじを履いて、泥沼になっている姿を見まして、朝3時頃から起こされて、地獄から迎えに来たのかなと思うようなことも何回もありました。先程申しましたが、『およう炊き』とか『おなか入り』とか一日5回も食事をするような実際の経験もあり、その当時の背景と言いましょか、栄養士さんが保母さんと共産党員になりました。今の時代を変えなければならぬと彼女たちの理念だったと思います。私はそこまですれず、排斥されて、私は辞めて、普通の生活をしました。学院大学を卒業の先生方がいらっしゃるの、古屋清子先生のことをお話させていただきます。良くご一緒に歩かさせていただきました。ドイツのケンネさんという英語科大学の教授の奥さんが講習会をして、勉強させていただきました、今でも、印象深いことは、若気の至りとして、ケンネ先生の助手を古屋先生になさっていただけたらと申しましたら、私はそのような年ではありませんとおっしゃったことが、大変印象に残っています。確かにある程度の年輩ですから、助手などというのは失礼であったのだと思います。それから時代に合わせて、料理教室もたくさんいたしましたし、現在では、米のコンクールだ、ヘルパーの講座から、何でも、やらしていただいております、うちの古山先生から、お座敷のかかったお姉さんみたいにどこへでも行くのと言われますが、今は、実践活動に力を入れています。先日も医師会館でこれが私の一番高い仕事だと言うことでシンポジウムに出ました。大学の教授や婦長さん達と、それで私は今まで何もない所、ほうとうばかりでおかずが何もない所等、自分の自費で調査をしました。果樹地帯や山の地帯、平地帯とか調査の資料がたくさんあった。今吉川先生が最初に行ったらおかずがない、次に行ったら二つあった。また次に行ったら三つあった。というようにそれでは30品目にしたらどうだということになり、30品目になった。順に変わって来た。現在、調理師学校をやっているが、時代の産物等と言われるが、どこまで残して行かれるかと考えているが、戦いみたいですが、勉強もしていかなければならぬし、経営もして、生活もして行かなければならぬし、いつも創造していかなければならぬ。だいぶ遅れてしまったなあと思います。学院の先生が一生懸命勉強して立派にやっちらっしゃるので、大変感心しています。また古山先生、深山先生、長田先生方もお話をお伺いしまして、私はおおざっぱでございますが、恐縮でございますが、皆様方、これからお仕事にがんばってください。以上でございます。」

牛山

「各先生から項目ごとにお話を伺いまして少し時間がかかってしまいましたが、中身とすれば濃密に出されましたが、まだ何か、これだけは話したいと言うことがありましたら残り時間の中でお聞かせいただきたいと思っております。」

役員さんの中で、こんな所は聞きたいと言うことがありましたら後で伺いたいと思っております。先生方いかがでしょうか。」

深山

「栄養士の方の仕事という面では、まだ後で話すとして、その時代の栄養士の活躍という先輩といえますか、この栄養士会の発展のためにご苦労願った中村君の仕事への感謝とか、もう一つ部外で手塚先生、□□□ この先生達は、山梨の栄養を掘り起こしをし、やってくれたから、基を開いてくれた先生達のご意見も取り入れて欲しい。役職というもの、役というものが人間を評価するのではなく、そんなことを考えているのは、国や県で、鈴木さんに、栄養士をやっていると課長にもなれないから、やめて、事務職になるように言われたが、栄養士の仕事をやりたいと言って事務屋にならないで、今でも幸せであったと思っている。栄養士としてみんなが参加して、栄養士の仕事をしていって欲しい。」

長田 ～山梨の栄養改善の仕事の流れはずば抜けていた。

日本栄養士会の10の紋章(花びら)は、佐伯先生の十訓だった。～

「20年全国を回っていました。一番感じたことは、山梨県の栄養改善の仕事の流れはずば抜けていると思っています。人事のこともやってきましたが、男の中村先生、梶原先生の仕事をほめられた

ことがありました。余談になりますが、兵庫県の教育部の学校給食の担当を兼務したことがありました。良い経験をしたのですが、神戸小学校で発見したのですが、先生がいかに重大だったかと思われました。同じ年齢層のクラス別に中毒患者の発生率が違うのです。こんなはずはないはずですがね。日本の軍隊などでも、食堂でたんぱく質の過剰給与による場合 今まで食べていなかったということで、こんなことがあります。担任の先生にあつて調査しました。先生の差が中毒患者数に比例して、先生の聞き方を判断することで違っていました。栄養日本のマークがありますが、山梨県の鈴木宗正さんと半田さんと私で全国へ募集したが、十の紋章、花びらがついていますが、因縁があり、今日根津先生が来られていませんが、佐伯先生は、佐伯十訓と言うものを自分で渡していた。根津先生はもらったはず。僕にはもらえなかった。その十訓が花びらになっている。国会の衆議院議員のバッジによく似ている。そういういきさつがある。参考までに」

増沢

「潜越でございますが、数年前、朝日新聞の郷土食の特色をつかもうではないかということで、□□の先生と原稿を書きまして、連載しましたものを本にしましたので、参考になりましたらと、記念になりましたら、ご希望でしたらどうぞ。」

牛山

「限られた時間の中で、先生方にいろいろお話しいただきました。何かご質問がありましたらどうぞ。」

深沢

「長田先生に、前に甲西町で栄養月報は、俺が起案して作ったと言われましたが、栄養月報を作りたいいきさつなど時間がありましたら聞かせてください。」

長田

「栄養月報を作ったのは、GHQへの報告、食糧庁、経済安定本部農林省に食糧を要求する資料を作るために是非必要でした。また、厚生省とし運営の実態を握るため必要だったのです。それで病院の担当栄養士の業務が多いことを考えて荷重分班表を利用しました。

そのため、分班表を作り生産統計、消費統計、市場統計などを長い時間をかけて調査して作っております。

牛山 ～栄養士の仕事も、理解のある方々や仲間がいたからだと言うことを学びました～

「他にございませんでしょうか。時間が過ぎていきますので、ここで一応閉めさせていただきますが、おおざっぱにまとめさせていただくと、それぞれの先生方が、その時代に築いてこられた中に、第一に感じたのは人との出会いの中で栄養士になぜなったのか、それに係わる仕事はどんなものだったのか、またそれらの仕事をされるには、理解のある方々の協力があつたとおっしゃっていらっしゃいましたが、私も、つくづくそう思います。1人では生きられない。社会の中で友達を得ることによって、仕事ができるのだと思います。栄養士というのは、栄養学というのは、単に学問というものだけでなく、実践に結びつく案内役をする、実践をすると言うことで、我々もこの道にいることをありがたく、感謝しています。いろいろお話しいただきましたが、これだけで終わるのはもったいないと思います。多くの先学者がいるということも聞かしていただく中で、栄養士の歩み、あるいはそれらの資料を先生方がお元気な時代にまとめなければいけないという使命感も強く感じたわけです。更にまた、実践栄養学であるだけに現場でのかわり、対応の仕方も、いろいろあると知らされた次第です。以上をもちまして座談会『山梨の栄養改善黎明期を語る』を閉じさせていただきます。司会進行大変つたないものですが終わりいたします。」

大木

「最後に、小沢副会長さんより終わりの言葉をお願いします。」

小沢

「3人の先生方貴重なお話をありがとうございました。情熱あふれるお仕事に対する取り組みをいつも伺っておりまして、尊敬し、ありがたく思っておりますが、更に今日は理解を深めることが出来まして、ありがとうございました。佐伯先生の十訓の話なども、ゆっくり聞きたいと思います。栄養士をするものとして、もっとあやかりたいと思えました。食糧難の昭和10～20年代の栄養改善の黎明期を語るという中で、困難な時代に仕事をしていらっしゃる、他県や厚生省の方でもご活躍なさっていらっしゃったこともよくわかりました。GHQの支援を受けて栄養改善をどのように進めていったらよいかと言うことも理解を深めることが出来ました。私も深山先生がおやりになったクルミの木を植えて、資源を作るということも、ちょうど採用された頃で、ドングリの粉のパンだとか、経済部と一緒に、クルミを植える運動などもいたしまして、昔を思い出しましたが、深山先生がおやりになりましたお仕事でお話なさらなかった仕事がいっぱいあるわけです。山梨県の県立中央病院と甲府保健所と一緒に、医学研究所が出来上がって、食糧難の時代から、日本も黎明期を迎えることで、どんな風に栄養をとったらよいかと言うことで、大きな、展覧会というか、□□□会をやったことがあった。その時は栄養士みんなで協力しまして、私 甲府保健所にいたんですが、『健康山梨』と言うことを吉江知事さんがうたい文句にして、当選して、力を入れて、栄養士が脚光を浴びている時代と感じました。増沢先生が共同炊事にいらっやして、私も今諏訪の方へお供しましたが、大変ご苦労なされたこともあり、今更のように感じまして、本当に恵まれた、大先輩のご努力を私達も汚さないように、一生懸命仕事に精出していかなければならないし、栄養士も多角的にもものを見て、あんまり、一生懸命になりすぎると、やはり広い角度で見ることが、出来なくなるかもしれませんので、皆さんとの交流を深めて、大先輩の仕事を益々発展させるようにやっていきたいなと感じました。まだこの時代、お元気でいらっしゃる五味みえこさん、手塚先生、武井さん、富岡さんとか、その時代に活躍した方々の一言を加えて、入れて小冊子が出来ればと思います。その後に梶原先生、中村先生とか私達の時代、キッチンカーの時代とかという時代に入ってくると思っています。皆さんウイークデーで仕事の忙しい中、ご苦労様でした。3人の先生方の情熱あふれるお仕事ぶりを聞かせていただきありがとうございました。」

大木

「長時間ご苦労様でした。」